

◆ 今週のコメント

- 手足口病の定点当たり報告数は、3.32(136例)で、4週連続して増加し、本年度で最も多くなっています。年齢階級別では、2歳が18.4%(25例)と最も多く、次いで1歳が17.6%(24例)、4歳が15.4%(21例)となっており、1歳～6歳が86.0%を占めています。行政区別では、11行政区のすべてから報告があり、南区、西京区では、定点当たり報告数が各々11.00、5.25となっています。
今月の「京都市こどもの感染症」(京都市衛生環境研究所作成)で、手足口病を取り上げていますので、ご参照ください。(<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000007130.html>)
- 流行性耳下腺炎の定点当たり報告数は、1.49(61例)で、本年度で最も多くなっており、過去5年平均値を大幅に上回る状態が続いています。年齢階級別では、5歳と4歳で多くなっています(5歳 24.6%(15例)、4歳 21.3%(13例))。

◆ 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、2.39(98例)で、3週連続で大幅に増加し、本年度で最も多くなっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- 三類:腸管出血性大腸菌感染症 3例(第25週, 第26週, 第27週分)【1月以降の累積報告数 11例】
- 五類:ウイルス性肝炎(B型) 1例(第26週分)【1月以降の累積報告数 2例】
- 五類:急性脳炎 3例(病原体(HHV-6) 1例, 病原体不明 2例)【1月以降の累積報告数 3例】
- 五類:クロイツフェルト・ヤコブ病(孤発性) 1例(第26週分)【1月以降の累積報告数 1例】
- 五類:ジアルジア症 1例【1月以降の累積報告数 1例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ*	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	3.88	159
	② 手足口病	3.32	136
	③ ヘルパンギーナ	2.39	98
	④ 流行性耳下腺炎	1.49	61
	⑤ 水痘	1.34	55
眼科	流行性角結膜炎	0.30	3

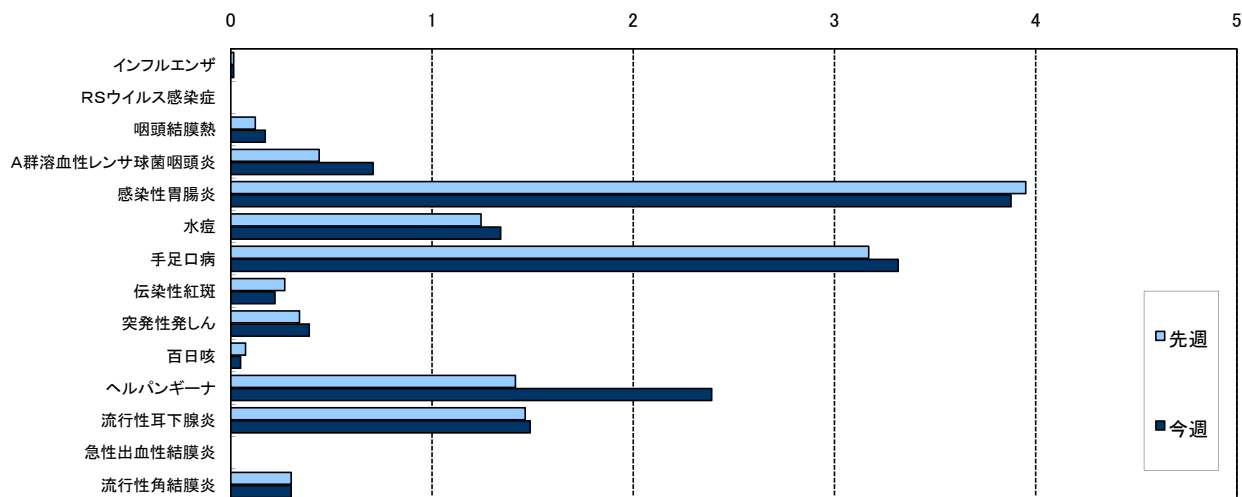
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <ヘルパンギーナ>

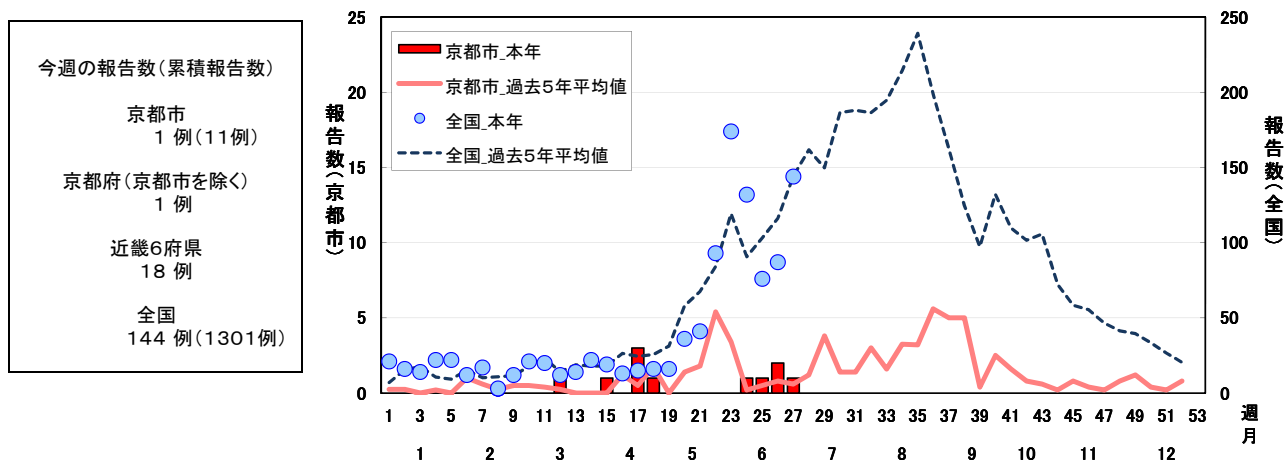
(注) 京都市のデータは、平成22年7月15日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第27週)と先週(第26週)の定点当たり報告数の比較

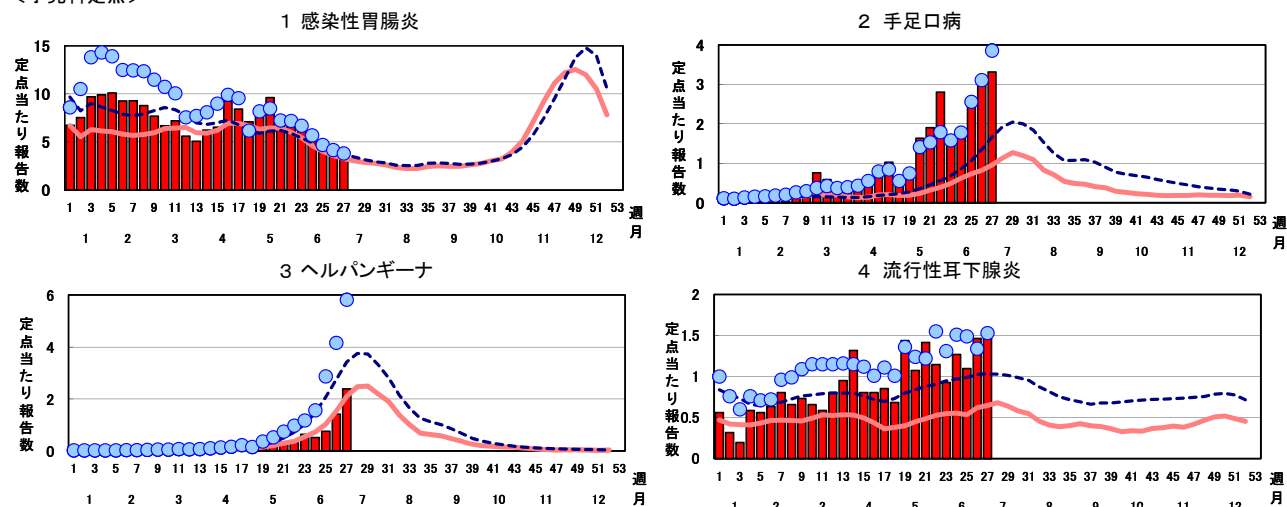


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

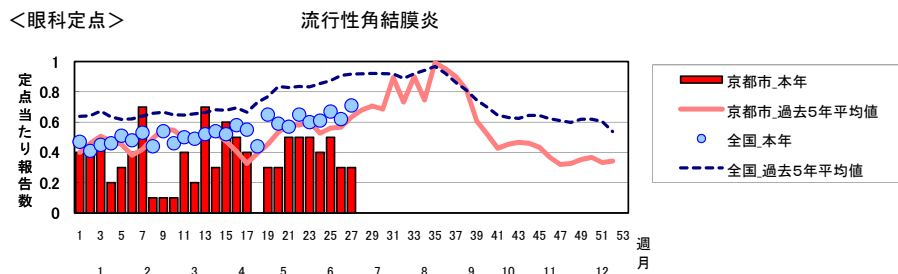


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第27週(7月4日～7月11日)トピックス: <ヘルパンギーナ>

ヘルパンギーナの定点当たり報告数は、2.39(98例)で、3週連続で大幅に増加し、本年度で最も多くなっています。

全国でも、大幅な増加が3週続いており、過去5年平均値を大きく上回る状態となっています(第27週の定点当たり報告数 5.82)。近畿地方では、滋賀県、兵庫県(各6.16)で警報開始基準値(*)6.0を超えています。

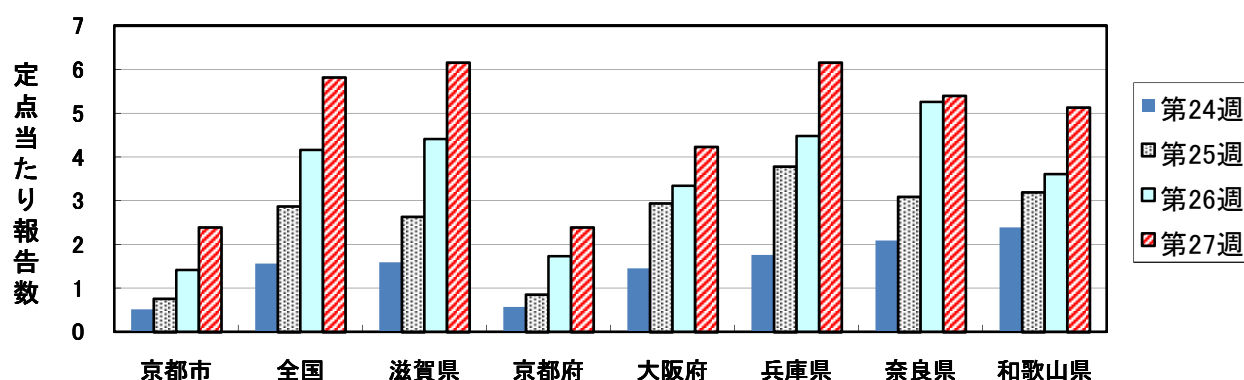
過去5年間では第28週～第32週(7月9日～8月9日)にピークを迎えています。今後の動向にご注意ください。

年齢階級別では、6箇月～5歳で先週に比べ増加しています。特に1歳が多くなっており、全体の36.7%(36例)を占めています。

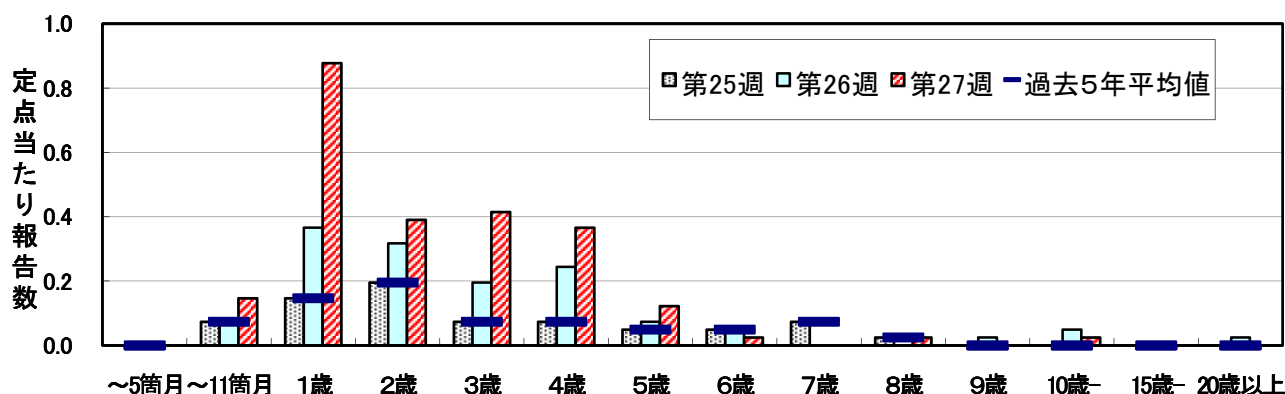
行政区別では、11行政区のすべてから報告があり、南区で多くなっています。

(※警報開始基準値・・・大きな流行が発生または継続しつつあることが疑われることを意味し、国立感染症研究所感染症情報センターが、全国の過去の発生動向調査のデータから、基準値を定めている。)

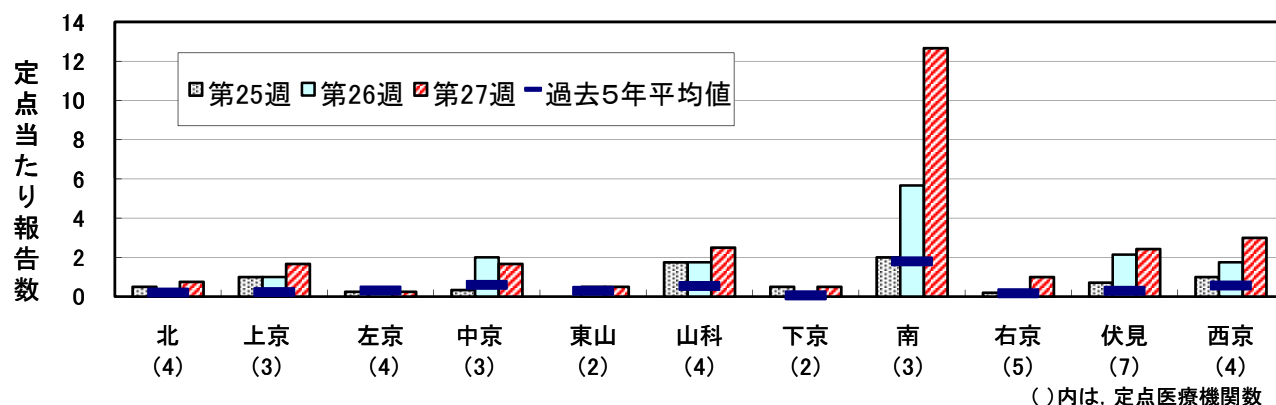
全国及び近畿地方各府県の定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移



行政区別定点当たり報告数の推移



()内は、定点医療機関数